

澤田柳吉の作曲・編曲活動と楽譜出版に関する一考察

多田 純一

1. はじめに

本論は明治後期から昭和初期にかけて活躍したピアニストである澤田柳吉(1886-1936)がどのような作曲・編曲活動及び作品出版を行ったのかについて概観し、その具体的な内容を考察するものである。

澤田は明治39(1906)年に東京音楽学校本科器楽部を卒業し、「ショパン弾き」と呼ばれてピアニストとしての活動を行った。明治45(1912)年にオールショパンプログラムにて日本人としてはじめてピアノリサイタルを行った人物として知られ、百年史などにおいても彼の名前は頻繁に見られる(秋山 1966; 東京芸術大学百年史編集委員会 1987など)。演奏活動、ピアノ教授、台湾における音楽教師、レコード録音、ラジオ放送、盲学校における音楽教師等、彼の音楽活動は幅広く行われたが、長い期間にわたって作曲・編曲活動も行っていった。彼の作曲・編曲活動のうち、「調和楽」として編曲された作品については溝渕悠里による卒業論文(溝渕 2005)で考察されている。しかしながら「調和楽」に限らず出版された作品は多く、さらに未出版の作品も多数見られるが、澤田の作曲活動や楽譜出版の意義が考察された先行研究はない。そもそも彼の音楽活動に関する研究は十分に行われているとは言いがたく、近年ようやくはじまったばかりである。

個々の事象についての先行研究は、先に挙げた溝渕による卒業論文(溝渕 2005)をはじめ、澤田と久野ひさ(1885-1925)の演奏様式について分析された渡辺裕による論文(渡辺 2001)、ニッポレコードにおける澤田の活動について述べられた渡辺による著書(渡辺 2002)、浅草オペラでの活動について断片的に述べられた増井敬二による著書(増井 1984、

1990)がある。澤田の音楽活動全般については、日本におけるショパン受容に果たした役割を考察した筆者による拙稿(多田 2011、2012)があるが、洋楽導入期におけるパイオニアとして彼がどのような活動を行ったのかについてはさらに詳細な研究がなされなければならない。本論では彼の作曲・編曲活動及び作品出版について考察する。

2. 楽譜出版

2.1 現存する澤田柳吉が出版した楽譜

澤田が出版した楽譜のうち、図書館などの機関に所蔵されている楽譜を調査した。この時代の楽譜資料については各図書館のOPACやCiNiiなどの検索サイトではごくわずしか検索することができず、個々の研究において博物館や美術館所蔵の資料をつぶさに調査する以外に方法はない。調査の結果、23件の楽譜が現存していることがわかった。楽譜出版作品一覧は文末の表1に示した通りである。独立した楽譜として出版されたものだけでなく、雑誌に掲載された楽譜も含んでいる。また、表1に示した楽譜以外にも複数出版されていることが判明している。上野正章による明治中期から大正初期にかけて洋楽器で日本音楽を演奏する試みについて考察された論文(上野 2012)⁽¹⁾では大正12(1923)年に発行された三木楽器店の楽譜目録が書き起こされているが、この中には澤田の名前で出版された楽譜として、表1の《越後獅子》、《元禄花見踊》と共に《かつぼれ》が掲載されている。また、同目録「ヴァイオリン楽譜日本曲」の項目には《勸進帳》が見られる。筆者の調査で入手した松本楽器店の目録においても

表1の《十日戎》、《江戸囃子》、《春雨》に続き、《相撲囃子》と《梅にも春》が記載されている。それぞれ「調和楽全集 第四」および「調和楽全集 第五」として出版されているように記載されているため、この松本楽器合資会社から出版された「調和楽全集」は全5曲出版されたことがわかる。先に述べたように、明治期から昭和初期にかけて出版された楽譜については、現物が図書館などの機関に所蔵されていないものも多く、個々の研究において調査がなされている。そのため、これら以外にも楽譜が出版されていた可能性があるが、これまでの楽譜目録の調査から表1および上記に記載した作品は、澤田が出版した楽譜について概ね網羅していると考えて問題はない⁽²⁾。

表1を分析すると、澤田の楽譜出版は大きく3つの時期に区切ることができる。第1期は雑誌掲載が中心となる習作期、第2期は「調和楽」出版の時期、第3期はセノオ楽譜における竹久夢二(1884-1934)とのコラボレーションを中心とする声楽作品が主として出版される大正期以降である。

2.2 習作期

管見によると、音楽雑誌に掲載された澤田の最初の作品は『音楽新報』第3巻1号(明治39年1月)のピアノソロ作品《元旦ポルカ》である。彼は明治39(1906)年7月に東京音楽学校器楽部在学中から作曲してただけでなく、自作品を公の場において発表していたことがわかる。作曲はピアノを師事していたヘルマン・ハイドリヒ(1855-?)のもとで学んだようである。澤田と同級生の小松耕輔(1884-1966)は次のように述べている。

先生に師事して非常に好都合であったのはピアノ以外に作曲をおそわることの出来た点である。先生はいつでもピアノの時間に作曲を見てくれ、懇切に指導してくれたのである。ピアノの時間はいつでも澤田柳吉と一緒にだった。澤田も作曲をやっていて、先生の指導を受けた。我々の時間は、それゆえピアノと作曲とは半々であった。(小松 1952:13)

澤田はピアノと作曲の両方をハイドリヒから教わっていたのだった。卒業演奏会では代表メンバーに選出されベートーヴェン作曲《ピアノ・ソナタ》op.14 No.1を演奏している。《元旦ポルカ》は、それほど困難な技術を要する作品ではないが、ピアノ演奏が一般的ではなかった当時ではどのように受け止められたのかは不明である。しかしながら、ピアノを専攻していた澤田の最初の作品がピアノ曲であること、複雑な和声や難しいパッセージを持たない古典派風の作品であることは、後にピアニストとして高く評価される彼の初期の音楽活動として特徴的であると言える。

器楽部を卒業し、研究部の時期となる同年の『音楽新報』第3巻11号(明治39年11月)には《女馬士唄》が掲載されている⁽³⁾。翌年の『音楽新報』第4巻5号(明治40年5月)には《BARCAROLLE》が掲載されたが、この作品が唯一澤田の作品の中でロマン派のピアノ曲を模倣して作曲されている雰囲気を持っており、明らかな作曲技術の発展が見られる。先に挙げた《元旦ポルカ》と《BARCAROLLE》のみが澤田によるピアノ曲のオリジナル作品であり、以降に取り掛かるピアノソロ作品は「調和楽」として日本の旋律を編曲したものである。「シヨパン弾き」と呼ばれた澤田がシヨパンの作品を模倣したピアノ曲に作風を発展させて作曲しなかったことは、ピアノ曲に求められる高度な技術や複雑な和声を活かして作曲することの難しさをピアニストであるがゆえに感じたのではないかと考えられる。また、作曲家としての彼の興味は、日本人として日本の旋律をいかに西洋化するか、ということに向かっていた。これらのことから、声楽作品を挟んで古典派からロマン派へと作風を変化させ、発展させたこの3作品は習作として位置づけられる。

2.3 模索期における「調和楽」出版

東京音楽卒業直後から澤田は「シヨパン弾き」と呼ばれ、明治42(1909)年2月に発行された『音楽界』第2巻第2号「シヨパン誕生記念号」では筑紫三郎から「シヨパンの名について、直ちに聯想するのは、吾が樂界の澤田柳吉氏である」(筑紫 1909:22)と紹介されている。この記事の直後、明治42年3月

から約1年間、澤田は台湾へ派遣され、台湾総督府中学校および台湾総督府国語学校にて音楽教師としての職に就いた。最初に出版された「調和楽」である《十日戎》は明治43年4月10日出版となっている。帰国前から出版は準備されていたと考えるのが自然であろう。この「調和楽」について小松は次のように述べている。

彼は邦楽にも通じていたので、よく長唄や地唄のメロディーをテーマにして、ヴァリエーションを作ったり、それに日本風のハーモニーをうけたりして、これを和洋調和楽と稱していた。卒業してからも、ずっとそれをつづけ、このうちの数種類は出版されている。「越後獅子」「十日夷」「春雨」などがそれである。彼は日本のメロディーには日本風の独特のハーモニーを付けなければならぬという意見を有し頻りに研究していた。彼は此の點に於て、たしかに先覺者の一人と云つてよい。(小松 1952:18)

澤田は学生時代から「調和楽」を模索していたのであった。楽器店が発行した楽譜目録は時期によって掲載されている楽譜が違っているが、明治43(1910)年10月に発行された『音楽界』第3巻10号の広告「松本合資會社新刊新着案内」には、Vol.1《十日戎》からVol.5《梅にも春》が掲載されており、大正5(1916)年3月改正の「合資會社山野楽器店 楽器樂書目録」には《十日戎》、《江戸囃子》、《春雨》が紹介されている。また、先に述べた上野の論文(上野 2012)に書き起こされた三木楽器店の楽譜目録には《越後獅子》、《元禄花見踊》、《かつぼれ》が紹介されており、少なくとも明治43年から大正5年まで正式な楽譜として出版され、長期的に販売されていたことがわかる⁽⁴⁾。十字屋楽器店から出版された「ピアノ譜 調和楽」のシリーズは本論で未入手の《かつぼれ》が最後の作品であると思われるが、大正4(1915)年出版に《元禄花見踊》が出版され、その後はセノオ楽譜の作品が中心となるため《かつぼれ》は恐らく《元禄花見踊》と同時期に出版されたのではないと思われる。澤田は「調和楽」について次のように述べている。

如何なる國でもその國々に依つて各々獨特の音樂がある。(中略)從來我國に於ても邦樂の研究に努めた人は尠くないが、如何せん唯在來の曲を樂譜に記録したといふに過ぎないので、音樂者其自身の創作的勞作を是れに加へたものは尠なかつた。予の淺才はもとより其任では無いが兼てより此點に注意を拂ふことを怠らなかつた。此度出版する本書の如きは唯其試みの一端に過ぎない。(澤田 1911:緒言)

澤田による「調和楽」は、邦樂の旋律を音符として書き起こしただけでなく、その旋律に和声を付ける試みがなされている。学生時代から「調和楽」を樂譜化する試みが行われ、最初の《調和楽》出版となる明治43(1910)年出版の《十日戎》から大正4(1915)年頃まで集中的に「調和楽」は出版された。器樂作品である「調和楽」を次々と出版したこの時期に次の声乐作品を中心とする時期の伏線が張られている。注目されるのは明治45(1912)年、東京音樂學校校友會雜誌『音楽』第3巻6号に掲載された《春雨》である⁽⁵⁾。その前年には「調和楽全集 第三」として同じタイトルの《春雨》が出版されているが、「調和楽」の《春雨》は端唄の同作品を編曲したものである。しかしながら、『音楽』第3巻6号の《春雨》は澤田のオリジナル作品となっている。相馬御風(1883-1950)の作詞であるが、前年に出版した作品と同じタイトルであり、西洋音階を使用しつつ、日本的な雰囲気を持つオリジナル作品という自身にとって新たな分野を切り開こうとした形跡が見られる。急速に洋樂受容が進む中で、日本の古典的な音樂をどのように表現するのか、また継承していくのか、という問題は、当時さまざまに議論されていた。澤田の「調和楽」について考察した溝渕は次のように評価している。

澤田の調和楽は、盛り上がりの時期を外していた。彼の調和楽の後に、洋樂界だけではなく邦樂界でも盛んに議論されるようになった日本音樂創造は、澤田の調和楽とは異なる脈絡のものである。ある意味では後の彼らの踏み台と

なった澤田の試みは、高まる軍国主義と無縁とは言わずとも距離を持ったものであったと言えるだろう。(溝淵 2005:28)

溝淵が言うように、澤田が「調和楽」を出版し終えた後、山田耕筰(1886-1965)は対位法を用い、宮城道雄(1894-1956)は楽器の改良や開発を行った。また、田中正平(1862-1945)は日本的和声を提示した。澤田の「調和楽」はこれらの発展の踏み台であったのかもしれない。しかし、恐らくそれは澤田にとっても自身の作曲活動を発展させるための模索期だったのではないかとも考えられるのである。また、明治45(1912)年に日本人としてはじめてピアノリサイタルを行った。プログラムはオールショパン作品である。「ショパン弾き」として認識されただけでなく、ピアニストとしての名声は十分に高まっていた。

2.4 円熟期における声楽作品

大正5(1916)年にセノオ楽譜から出版された《麗はしき天然》以降は声楽作品が中心となる。しかしながら、当初は《調和楽》で用いた手法を声楽作品に敷衍させており、完全なオリジナル作品ではない。《麗はしき天然》は田中穂積作曲《美しき天然》に前奏、伴奏およびヴァイオリンによるオブリガートを付けたものであり、楽譜にはその旨説明が記載されている。同じ時期に出版された《お江戸日本橋》についても同様であり、日本古謡あるいは俗謡として歌われていた『東海道五十三次』からの抜粋に伴奏を付けたものである。ただし‘Voice or Violin’と記載されているため、声楽あるいはヴァイオリンのどちらで演奏してもよいことを示す楽譜になっている。この作品は澤田の編曲と伴奏により三浦環(1884-1946)がSPレコードに録音している(ニッポノホン 5179)。三浦は海外におけるリサイタルで《お江戸日本橋》をよく歌うレパートリーに加えていたと言われている。

澤田が本格的にオリジナル作品に取り組むのは、共にオペラの普及に取り組んだ小林愛雄(1881-1945)が作詞した《春の愁ひ》以降である。《麗はしき天然》、《お江戸日本橋》と同じく大正5年に出版され、翌大正6年には《秋の海岸に立

ちて》が出版された。明治39(1906)年、小林は小松と共にオペラ普及のため「楽苑会」を結成した。翌明治40(1907)年4月13日に行われた第2回公演では、澤田が作曲し小林が演出したパントマイム《影法師》が上演されており、共に作品を作るのはこれが最初ではない⁽⁶⁾。

新たな取り組みとなるのは、数多くの美人画を描いた竹久夢二との共作である。竹久がセノオ楽譜の表紙を描いたことはよく知られる。表紙を最初に描いたのは先に挙げた《お江戸日本橋》である。その後、大正7(1918)年出版の《もしや逢ふかと》から翌大正8年出版の《ふるさと》までの4作品は表紙と共に作詞も竹久が手掛けている。大正8年にはベートーヴェン作曲《ピアノ・ソナタ》op.13「悲愴」第一楽章をレコード録音しており(ニッポノホン 1890-1891)、この録音は日本人としてはじめてのベートーヴェン作曲《ピアノ・ソナタ》の録音である。澤田の絶頂期であり、現在で言うところのビッグネームによるコラボレーションが行われていた。このように声楽作品を立て続けに出版していた背景には、当時の澤田の興味が浅草オペラに向かっていたことと無関係ではない。むしろ密接していると考えられるのが自然である。

澤田が最初に浅草の舞台に立ったのは、大正7年2月24日、日本館への出演が最初であり、ベートーヴェン作曲《ピアノ・ソナタ》op.27 No.2「月光」を演奏した。翌年には常盤楽劇団の代表者にもなっており、作曲家としても活動していた。大正10(1921)年8月12日には金竜館において根岸歌劇団により澤田による《酒の匂ひ》も上演されている。しかしながら、この浅草における音楽活動が楽壇において物議をかもし、しばらく演奏活動を制約されることになる。東京朝日新聞では大正10(1921)年3月1日にオールショパンプログラムにてリサイタルを行うが、2月4日付けの読売新聞では次のように掲載されている。

じきぞくしやくわい ちょうじ うた さくきよくか
一時貴族社會の寵児と謡はれたピアニストであり作曲家
なるさはだりうきちし きぞくしやくわい ちょうじ い
澤田柳吉氏は貴族社會の寵児と言はれたるのを憤慨
じようりうがくだん とほ みんなしうおんがく た おんがくがくこうほうめん
し上流楽壇から遠ざかり民衆音樂の爲めに音楽學校方面
からあつぱくをう ひさ がくだん から わす る
から壓迫を受け久しく楽壇から忘れられて居たが氏の

天才的音樂に渴仰して居る人々は此の樂界の□人を葬るに忍びないとて今回福原俊丸□が主催と成つて三月一日夜丸の内工業倶楽部の新奏樂堂で氏の爲めに大音樂會を開く事と成つた。(中略)此奏樂堂に澤田氏が起つと云ふとは大分音樂界の注目を集めて居る。(『讀賣新聞』1921年2月4日5)⁽⁷⁾

宣伝効果を期待した新聞記事であるため多少の誇張は含まれていると思われるが、演奏活動が制限されたことは確かである。また、セノオ楽譜についても大正8年出版の《夕暮》が最後となった。

3. 手稿譜とピアノロール

3.1 手稿譜

出版譜以外にも未出版の手稿譜が明治学院大学付属日本近代音楽館に所蔵されている。すでに出版された作品に加え、《天調節行進曲》、《あみうち(晴天)》をはじめ、約40点の手稿譜が所蔵されており、スコア譜やパート譜、ピアノ譜など形態は様々である。現在整理中の資料を特別な許可により閲覧させていただくことができた。そのため、所蔵資料一覧については現時点で示すことができない。本論では許可を得て所蔵資料の一部について言及する。

本論で注目するのは、所蔵資料のうち13点について自動ピアノのロール用に準備された手稿譜である。使用される言葉に揺らぎはあるが「プレイヤーロール原譜」あるいは「プレイヤーピアノ原譜」などの言葉が、通し番号、日付と共に記載され、中央にタイトルが示されている。以下に通し番号と年月日、タイトルを示す。

- ・第22号 大正5年6月24日《天長節行進曲》
- ・第40号 大正4年12月25日《連獅子狂の手》
- ・第41号 大正4年12月25日《金時》
- ・第44号 大正4年12月25日《伊豫節》

- ・第47号 大正5年2月2日《長唄 小鍛冶》
- ・第48号 大正5年2月2日《長唄 勸進帳》
- ・第99号 大正5年8月18日《降りて行く》
- ・第103号 大正5年9月22日《腕久》(長唄合の手)
- ・第104号 日付記載なし《あみうち(晴天)》
- ・第111号 大正5年10月23日《夕暮。潮来。縁かいな。》
- ・第127号 大正6年4月29日《日本タンゴ》(益田太郎冠者作)
- ・第159号 大正8年4月4日《長唄たぬき 下巻》(昔ばなし)
- ・番号記載なし 大正5年6月24日《Tokaebisu Variationen》

第22号と第40号は通し番号と日付に入れ違いが見られるが、それ以外は番号が少ないほど日付は早く、多いほど遅くなる。この通し番号が意味するのは他の作者による作品も含めてピアノロールのシリーズそのものの通し番号なのか、あるいは澤田が手掛けた作品の通し番号なのかは現存している13点の手稿譜ではわからない。今後は他の作曲家の手稿譜などを検討していく必要がある。

この自動ピアノのロール作成用の手稿譜に注目した理由は、長唄が多く、第127号《日本タンゴ》以外のすべての資料に「沢田柳吉調和」⁽⁸⁾と記載されていることである。澤田によるオリジナル作品は含まれていない。「2.3 模索期における「調和楽」出版」において述べた通り、澤田は主に明治期の間に「調和楽」を出版し、最も遅い作品でも大正4(1915)年出版の《元禄花見踊》および出版年不明の《かっぱれ》である。これら「調和楽」の楽譜出版の最後の時期と、ピアノロール作成が始まる時期が概ね一致している。そしてピアノロール作成が終わる時期とセノオ楽譜出版の最後の時期も一致しているのである。これらのことを踏まえると、澤田は「調和楽」の編曲をしなくなったのではなく、作品を発表するメディアを選択していたのであった。すなわち、彼にとって作曲活動は楽譜出版に直結し、「調和楽」の編曲活動は楽譜出版にこだわらず、時代のメディアに応えた作品として考えていたと思われる。続いてピアノロールについて検討する。

3.2 自動ピアノとピアノロール

澤田の孫にあたる澤田勲男氏によると、澤田は日本楽器製造株式会社（現在のヤマハ株式会社、以下日本楽器と記す）の自動ピアノ製造に大きく貢献したと伝えられているということである。勲男氏の所蔵資料には明治40（1907）年の日本楽器創立10周年記念祝賀会の記念写真がある⁹⁾。写真には山葉寅楠（1851-1916）や伊澤修二（1851-1917）等と共に澤田の姿が見られ、ヤマハとの関連を示すひとつの資料である。東京音楽学校を卒業した翌年のことであり、ピアニストとして大きく期待されていたことがわかる。伊庭孝（1887-1937）は澤田がピアノロールを作成していた様子を次のように述べている。

澤田が共益商社からピアノを持って来ては賣り、賣ってはもって來ること、何臺だったか分らない。彼は共益の自動ピアノの日本風の曲の譜を作ってみたのである。（伊庭 1936:225）

この文章で意味する「譜」とは楽譜のことなのか、あるいはピアノロールのもとになる部分のことなのか判明しない。しかしながら、ピアニストである澤田が作曲するたびに新たなピアノを何台もわからないほど自宅に持って帰ったとは考え難い。いずれにせよ、上記の引用から澤田自身がピアノロールの作成に関わり、自身の演奏をロールに記録したと考えるのが自然である。

自動ピアノは一見通常のピアノと同様であるが、アップライトピアノの場合は正面中央にロール紙取り付け窓があり、内部には再生機が設置されている。三浦啓市によると日本楽器は明治45（1912）年に第1号と第2号を発売したとのことである（三浦 2012:70）。当時は電気ではなく、リードオルガンのような左右のペダルを交互に踏むことで空気を送り、ロールを回転させる方法であった。明治45年から昭和初期にかけて足踏み式自動ピアノは販売されたが、個人所蔵以外では、博物館などの機関で所蔵し、公開されている自動ピアノはごく少数である。本研究の調査では、秋田県立博物館に所蔵されている

昭和3（1928）年製造のピアノ1台のみを確認することができた¹⁰⁾。本学をはじめ自動ピアノを所蔵している大学や博物館は多いが、この時代に製造された国産の自動ピアノは見られず、貴重な1台である。ピアノロールで再生する音楽は、SPレコードに比べてダイナミック・レンジが狭い上、ロールの回転で本来の記録とは違った独特の揺らぎが生じるが、当時のピアニストがどのような演奏をしたのかを知る重要な資料であることに変わりはない。しかしながら、我が国において国産のピアノロールについての先行研究は見られない。

同館には澤田のピアノロールも所蔵されている。作品は文末の図1に示した《調和越後獅子》である。明治45年に楽譜として出版されているが、明治学院大学附属日本近代音楽館所蔵の手稿譜資料には含まれていない。

他の機関におけるピアノロールの所蔵を調査したところ、群馬県の広瀬川美術館に所蔵されていることがわかった¹¹⁾。所蔵資料は《筑摩川》、《花は色色》、《香に迷ふ》、《調和小鍛冶》、《梅は咲いたか》の5点である。図2に《花は色色》のロールを示した。日本近代音楽館所蔵の手稿譜資料と一致するのは《調和小鍛冶》のみである。記載は統一されておらず、《筑摩川》、《香に迷ふ》には「澤田柳吉調和」、《調和小鍛冶》には「澤田柳吉編」、《花は色色》と《梅は咲いたか》には「澤田柳吉」と併記されている。これらのことを鑑みると、手稿譜資料として現存している作品以外にも多くの作品のロールが販売されたと思われる。このことは、澤田は楽譜出版にこだわらず時代のメディアに応じて作品を発表していたことを明確にしている。

3.3 澤田家所蔵のアルバムと自筆譜

澤田勲男氏のもとには澤田家に伝わるアルバムが現存しており、所蔵されている。このアルバムには澤田の写真に加えて、澤田が死亡した際の追悼記事や新聞記事、遺作となる自筆の《暁山雲》の楽譜が張り付けられている。この《暁山雲》の作曲年については楽譜に記されていない。全3頁からなる声楽曲である。「暁の 空の濃き雲 薄き雲 雲みな動く 山に沿ひつつ 山に沿ひつつ」というごく短い歌詞に8小節の

前奏、12小節の前半歌唱部分、4小節の間奏、12小節の後半歌唱部分、8小節の後奏で構成され、全44小節の作品となっている。澤田氏の許可を得てアルバムの表紙および《暁山雲》の1頁目を文末の図3および図4に示した。澤田の未出版の遺作であり、かつ個人所蔵の資料のため、資料価値の高いものである。

《暁山雲》は恐らく澤田の後期の作品であると思われるが、昭和4(1929)年に出版された《白鳩のむれ》と同様に声楽曲であり、いずれの調性も変口長調であるところが共通点である。同年から澤田は大阪市立盲学校にて音楽教師となった。当初は非常勤講師であるが昭和6年からは教諭として採用され、死亡するまで同校に勤めた(大阪市立盲学校七〇年史編集委員会1970:付録44)。すなわち、澤田の最後の仕事ということになる。セノオ楽譜で出版された声楽曲は竹久が描く女性画に影響を受けたのか恋愛に関する作品がほとんどであるのに対し、後期の作品は自然や動物の様子を描写している作品であるところが特徴である。

4. まとめ

本論の目的は、澤田柳吉が行った作曲・編曲活動及び作品出版を行ったのかについて概観し、その具体的な内容を考察することであった。初期の作品から遺作まで、約30年間に作曲および編曲された作品には、澤田の興味の移り変わりや状況が反映されている。澤田の作曲・編曲活動及び作品出版の特徴は以下のようにまとめることができる。

1. 習作期となる第1期、「調和楽」の出版を中心とする第2期、声楽作品が主として出版される大正期以降を第3期として、3つの時期に区分することができる。
2. 澤田は楽譜としての出版だけでなく、ピアノロールとしての出版も彼の音楽をメディアに残す活動のひとつの形であった。
3. セノオ楽譜の出版を中心とする大正中期頃は恋愛に関

する作品を多く手掛けているが、昭和に入ると自然や動物の様子を描写している作品に変化する。

澤田を作曲家として見た場合、彼が出版した作品は決して多いとは言えない。しかしながら、一時的にはなく学生時代から少なくとも昭和4年までの四半世紀にわたって出版活動を継続させている。このことは、生涯にわたって作曲・編曲活動を行っていたと言っても過言ではなく、ピアノ演奏およびピアノ教授活動と並んで重要な音楽活動であったことがわかる。彼にとっての作曲・編曲活動は、必ずしも楽譜出版には結びついておらず、ピアノロールやSPレコードなど、メディアに合わせて発表することができる音楽活動の一環であったと考えられる。当時のピアノロール出版における澤田の作品の位置づけについては今後の課題としたい。

※本研究はJSPS科研費24820066の助成を受けたものです。

[引用文献]

- 秋山龍英(編著):井上武士(監修)
1966 『日本の洋楽百年史』東京:第一法規。
伊庭孝
1936 「天成の人であった澤田」『月刊楽譜』第25巻10月号:224-225。
上野正章
2012 「明治中期から大正期における洋楽器で日本伝統音楽を演奏する試みについて—楽譜による普及を考える—」日本伝統音楽研究センター研究紀要『日本伝統音楽研究』第9号21-42。
大阪市立盲学校七〇年史編集委員会
1970 『大阪市盲教育70年史』大阪:大阪市立盲学校。
小松耕輔
1952 『音楽の花ひらく頃—わが思い出の樂壇』東京:音楽之友社。
澤田柳吉
1911 「緒言」『調和楽 越後獅子』東京:十字屋楽器店。
多田純一

2011 「澤田柳吉(1886-1936)の音楽活動と日本におけるショパン受容」『音楽表現学』Vol.9:13-30.

2012 『明治期の日本におけるショパン像の形成—楽譜受容と演奏受容を中心に—』[博士論文]大阪芸術大学。

筑紫三郎

1909 「ショパン印象録」『音楽界』第2巻第2号:21-22。

東京芸術大学百年史編集委員会(編)

1987 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』東京:音楽之友社。

増井敬二

1984 『日本のオペラ—明治から大正へ』東京:民音音楽資料館。

1990 『浅草オペラ物語 歴史、スター、上演記録のすべて』東京:芸術現代社。

溝淵悠理

2005 『調和楽の試み—澤田柳吉が求めた音楽の新境地—』[卒業論文]大阪大学。

三浦啓市

2012 『ヤマハ草創譜—洋楽事始から昭和中期までの70年余をふりかえる—』静岡按可社。

渡辺裕

2001 「大正期日本の西洋音楽受容の一側面—澤田柳吉と久野ひさのベートーヴェン演奏の様式分析」海老澤敏先生古希記念論文集編集委員会[編]『モーツァルティアーナ 海老澤敏先生古希記念論文集』東京:東京書籍:527-534.

2002 『日本文化 モダン・ラブソディ』東京:春秋社。

註

- (1) 完全版PDFは以下のアドレスに掲載されている。 http://w3.kcuu.ac.jp/jtm/publications/2012/pdf/09kiyou_ueno.pdf#search=%E4%B8%8A%E9%87%8E%E6%AD%A3%E7%AB%A0+%E7%9B%AE%E9%8C%B2 (2013年5月30日検索)
- (2) 本論で確認した主な目録は以下の通りである。「十字屋楽器店販賣書籍概目」十字屋楽器店 明治41年7月、「松本合資會社新刊新着案内」『音楽界』第3巻第10号広告 明治43年10月、「松本楽器合資會社樂器樂書目録」松本楽器合資會社 明治44年6月、「松本楽器合資會社樂器樂書目録」松本楽器合資會社 明治45年6月、「西川樂器定價表」西川樂器店販売部 大正3年、「合資會社山野樂器店 樂器樂書目録」合資會社山野樂器店 大正5年3月、「山野樂器店樂器目録」合資會社山野樂器店 発行年月不明。

(3) この作品は昭和5(1930)年に辻弘子の歌唱により《女馬小唄》としてレコード化された(ポリドール364)。現在、田中銀之助および黒木寛(黒木耳村の本名)による2つの旋律が見られるが、澤田もこの作品に旋律を付けており、3種類存在することになる。田中は明治38年に東京音楽学校甲種師範科、黒木は明治40年に同校甲種師範科を卒業しており、明治39年に同校器楽部を卒業している澤田と遠くない存在である。

(4) 現在《十日戎》、《六段》、《越後獅子》は国会図書館デジタル化資料において確認することができる。

(5) 表1に示した通り、昭和3(1928)年に共益商社から出版された。編者である若狭萬次郎は「本曲は澤田柳吉氏早年期の傑作であります。此度同氏の快諾と厳密なる再訂再校とを経て上梓いたしました」と述べており、彼の初期の作品に需要があったことがうかがえる。

(6) このパントマイムは日本における最初のパントマイム上演であると言われている。

(7) 「復活した奇才 澤田氏」。判読不可能な文字は□で示した。

(8) 澤田は署名の際に「沢田」あるいは「澤田」のいずれも使用している。手紙や葉書においても両方の場合が見られ、統一されていない。

(9) 同じ写真は三浦啓市の著書(三浦 2012:61)に掲載されている。

(10) 浜松市楽器博物館の学芸員である梅田徹氏から秋田県立博物館に所蔵されている情報をいただいた。また、梅田氏からは先行研究の少ない自動ピアノについて多くのことをご教授いただいた。秋田県立博物館では学芸員の高橋正氏と浅利絵里子氏から丁寧な説明していただき、貴重な資料である澤田が作成した《調和楽越後獅子》のピアノロールを再生してくださった。また、このことがきっかけとなり、平成25年3月24日には同館にてレクチャーコンサート「明治・大正期のショパン弾き」澤田柳吉と秋田ゆかりの人物を開催させていただいた。あらためて感謝申し上げます次第である。

(11) 所蔵については夏目久生氏から教えていただいた。また、中森社長をはじめ、同社技術部部長の志村秀治氏、同社ピアニストの松原聡氏から資料をご紹介いただき、自動ピアノの構造などについて詳しくご教授いただいた。あらためて感謝申し上げます次第である。

表1 澤田柳吉の楽譜出版作品一覧

発表・出版年	月日	作品名	形態	作詞者	出版社	所蔵	備考
明治39 (1906) 年	1月15日	元旦ポルカ	ピアノソロ		音楽新報社	国立国会図書館	『音楽新報』第3巻1号掲載
〃	11月15日	女馬士唄	声楽	黒木耳村	音楽新報社	国立国会図書館	『音楽新報』第3巻11号掲載
明治40 (1908) 年	5月1日	BARCAROLLE	ピアノソロ		音楽新報社	大阪音楽大学図書館	『音楽新報』第4巻5号掲載
明治43 (1910) 年	4月10日	十日戒	ピアノ、三絃		松本楽器合資会社	国立国会図書館	「調和楽全集 第一」
〃	5月5日	江戸囃子	ピアノ、三絃		〃	大阪音楽大学音楽博物館	「調和楽全集 第二」
明治44 (1911) 年	10月8日	六段	ピアノソロ		十字屋楽器店	国立国会図書館	「ピアノ楽譜 調和楽」
〃	11月15日	春雨	ピアノ、三絃		松本楽器合資会社	奥中康人氏個人所蔵	「調和楽全集 第三」※1
明治45 (1912) 年	1月4日	越後獅子	ピアノソロ		十字屋楽器店	大阪音楽大学博物館 国立国会図書館	「ピアノ楽譜 調和楽」
〃	6月20日	春雨	女性二重唱	相馬御風	東京音楽学校校友会	東京藝術大学附属図書館ほか	『音楽』第3巻6号掲載
大正4 (1915) 年	10月5日	元禄花見踊	ピアノソロ		十字屋楽器店	大阪音楽大学音楽博物館	「ピアノ譜 調和楽」
大正5 (1916) 年	4月15日	麗はしき天然	声楽、 ヴァイオリン	武島羽衣	セノオ音楽出版社	佐久間絹子氏個人所蔵 ※2	田中穂積作曲
	4月18日	お江戸日本橋	声楽、 ヴァイオリン		セノオ音楽出版社	佐久間絹子氏個人所蔵	歌詞は東海道五十三次から抜粋
〃	4月28日	春の愁ひ	声楽	小林愛雄	愛音会出版部	国立国会図書館	『春の愁ひ 他三曲』
大正6 (1917) 年	11月6日	秋の海岸に立ちて	声楽	小林愛雄	愛音会出版部	筆者個人所有	『現代唱歌集(1)』
大正7 (1918) 年	12月12日	もしや逢ふかと	声楽	竹久夢二	セノオ音楽出版社	澤田勲男氏個人所蔵 ※3	
大正8 (1919) 年	1月29日	雪の扉	声楽	竹久夢二	〃	佐久間絹子氏個人所蔵	
〃	1月29日	街灯	声楽	竹久夢二	〃	竹久夢二伊香保記念館	
〃	1月29日	ふるさと	声楽	竹久夢二	〃	佐久間絹子氏個人所蔵	
〃	2月21日	麓の道	声楽	伊庭孝	〃	佐久間絹子氏個人所蔵	
〃	不明	夕暮	声楽	相馬御風	〃	竹久夢二美術館	
昭和3 (1928) 年	8月4日	春雨	女性二重唱	相馬御風	共益商社	筆者個人所有	若狭萬次郎編
昭和4 (1929) 年	8月10日	白鳩のむれ	声楽	福原俊丸	大阪洋楽研究所	明治学院大学付属日本近代音楽館、澤田勲男氏個人所蔵	
〃	10月5日	片山津小唄	ハーモニカ	佃血秋	スワン音楽出版社	大阪音楽大学音楽博物館	東亜キネマ映画小唄

※1 その他に雑誌広告では「調和楽全集 第四」《相撲囃子》および「調和楽全集 第五」《梅にも春》が紹介されている。

※2 澤田柳吉の遺族。次男・隆廣氏の次女にあたる。

※3 澤田柳吉の遺族。次男・隆廣氏の長男にあたる。



図1 澤田柳吉《調和越後獅子》ピアノロール

秋田県立博物館所蔵



図2 澤田柳吉《花は色々》ピアノロール

日本ピアノホールディング株式会社代表取締役
中森隆利氏個人所有、広瀬川美術館所蔵



図3 澤田家に伝わるアルバムの表紙 澤田勲男氏個人所蔵



图4 《晓山雲》1頁目 澤田勲男氏個人所蔵